

国語における一音節の発音型式について

前 田 正 人

昭和二十六年六月、服部四郎博士の「音韻論と正書法」と題する著書が出版された。その中に「国語の音韻体系」なる論考が収められている。それは国語の音韻を対象として、それらの間に成り立つ関係が一定の整然たる体系的構成を有する表の形であらわされ得ることを示したものであつて、国語の音韻論的解釈として劃期的なものであることは今更喋々するを要しないであろう。音韻論乃至音声学に対して博士の万分の一の知識さえ有しない末輩の身でこの偉業に対して反論を試みるなどということは身の程知らずのしわざかもしれないが、博士の論中で二三納得のゆかぬ箇所を見出したのでその疑問をきつかけとして聊か考えたところを述べて見たい。なお本稿はさしあたり国語（東京・大阪方言等）において社会的慣習的に定まつている一音節の発音のみを対象とする。二音節以上の発音その他音韻論上の種々の問題に関しては又別の機会をもちたい。

一、発音型式の種類

我々は通常「ア」「イ」「ウ」……というような音節を単独に発音することができる。しかもそのような発音の種類は一つの言語集団（方言社会）毎に慣習的に一定しており、その言語集団に属する各人はこれらの発音を一定の型にはまつたように繰返すことができる。表題に掲げた発音型式という語はこのような社会的慣習的に定まつた発音をさすので

ある。ところでこのような発音型式の種類を標準的な国語（便宜上の名称である。実質的には服部博士の所謂『ヒ』と『シ』

「ヒャ」と「シャ」等の区別のある東京方言及びそれと同じ音素体系の諸方言』に相当する）について見ると表一に掲げたような

表一

ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ	ワ
カ	キ	ク	ケ	コ	キャ	キュ	キョ	
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギユ	ギョ	
(カ)	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギヤ	ギユ	ギョ	
サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ	
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ	
タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ	
ダ			デ	ド				
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ	ニユ	ニョ	
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ	ヒユ	ヒョ	
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ	ビユ	ビョ	
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピヤ	ピユ	ピョ	
マ	ミ	ム	メ	モ	ミヤ	ミユ	ミョ	
ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ	リユ	リョ	

100 (108) の種類が認められる。^①この表の中に撥音「ン」促音「ッ」等が見当たらないのは、標準的な国語を話す人の中にはこれらを単独に発音することができず、たとえば「ン」を強いて発音すれば「ウン」と二音節に聞えるような発音になつて了う人があるからである。^②つまり「ン」は一音節を発音する場合の発音型式としては社会的に慣習化されていると見做し得ないから表中に加えられていないのである。促音等についても同様なことがいえる。

二、タチツテトチャチュオダデドワ以外の発音について

ところでこれらの発音の内タチツテトチャチュオダデドワを除いたものの間には調音上、表二（次頁参照）の如き関係が成り立つ。

表二の説明

表の縦横の系列は調音の相似的關係に基いて構成されている。縦の系列の各音においては最初の部分に類似の調音があらわれる。例えばカキクケコキャキュキョでは軟口蓋閉鎖無声、サシスセソシャシュショでは舌先摩擦無声、バビブベボビャビュビョでは両唇閉鎖有声という調音が最初にあらわれる。又横の系列においても各音に類似の調音が認められる。例えばアカガサザナハバパマラの末尾においては調音器官は略々「a」の構えを取り、イキギシジニヒビピミリでは「i」の構えを取る。又ヤキャギヤギヤシャジャニヤヒヤビヤピヤミヤリヤにおいては舌面の前部が口蓋に著

表二

ra ラ	ma マ	pa パ	ba バ	ha ハ	na ナ	za ザ	sa サ	ga ガ	ka カ	'a ア
ri リ	mi ミ	pi ピ	bi ビ	hi ヒ	ni ニ	zi ジ	si シ	gi ギ	ki キ	'i イ
ru ル	mu ム	pu プ	bu ブ	hu フ	nu ヌ	zu ズ	su ス	gu グ	ku ク	'u ウ
re レ	me メ	pe ペ	be ベ	he ヘ	ne ネ	ze ゼ	se セ	ge ゲ	ke ケ	'e エ
ro ロ	mo モ	po ポ	bo ボ	ho ホ	no ノ	zo ゾ	so ソ	go ゴ	ko コ	'o オ
(rja リヤ	(mja ミヤ	(pja ピヤ	(bja ビヤ	(hja ヒヤ	(nja ニヤ	(zja ジヤ	(sja シヤ	(gja ギヤ	(kja キヤ	'ja ヤ
(rju リュ	(mju ミユ	(pju ピユ	(bju ビユ	(hju ヒユ	(nju ニユ	(zju ジュ	(sju シュ	(gju ギユ	(kju キユ	'ju ユ
(rjo リョ	(mjo ミョ	(pjo ピョ	(bjo ビョ	(hjo ヒョ	(njo ニョ	(zjo ジョ	(sjo ショ	(gjo ギョ	(kjo キョ	'jo ヨ

しく接近した略々「i」に近い構えから「a」の構えにうつるといふ類似の調音があらわれる。

もつともこれらの類似の調音も個別的に見るとそれぞれ異つてゐる。例えばビの始めの両唇閉鎖音にはバのそれに比して著しい口蓋性が認められる。しかしそのような差違はビバの属する横の系列の各音間（アとイ・カとキ・ガとギ等）に一貫して認められるものである。又ヤキヤギヤ等における「a」に至る以前の舌面の前部が口蓋に接近した構えも各音毎に見ればかなり異つてゐる。シヤは口蓋化した舌先摩擦的調音から「a」に続く。ビヤは口蓋化した両唇閉鎖有声の調音から「a」に続く。しかしそのような差違（舌先摩擦・両唇閉鎖有声という差違）はシヤビヤの属する縦の系列の差違に基くものである。かくて一般に系列中の各音の調音にはその音の属する縦の系列に共通した特徴と横の系列に共通した特徴がみとめられ、又各音の調音の差違はその音の属する縦横の各系列に共通する調音の差違に相当するといふことができるのである。そして a i : (ja (ju : k g : : : : : 等の符号^③「以下音声符号と区別するため//内に入れて示すことがある」はこのような各系列間の調音

の相似的關係をあらわすものであつて、それぞれの符号は各系列に共通する調音上の特徴をあらわすものと考えてよい。^④ 又各音を'a'i'u:::kaiku等とあらわし、a'i'u:::akikuk等とあらわさないのは、縦の系列に通ずる調音上の特徴は各音の前部において最も顕著であり、横の系列のそれは後部に近づくにつれて顕著になるという事実に基づく（たとえばヤキヤギヤ等の最末尾部の調音はすべて概略的に〔a〕であらわされるようにほとんど區別しがたいほどよく似ているが、始めの口蓋性の強い部分ではそれぞれ縦の系列の特徴が顕著に認められる。）

この表に示されたような事実は部分的には既に従来の音声学者によつて指摘されて来たことでもあるし、殊に体系そのものの構成に関しては服部博士の見解とも結果的には一致するから詳細は省略する。^⑤ ただ本稿にとつて重要と思われる一二の点について述べておきたい。

先ずこの表に示されたような結果は調音の比較によつて得らるべきもので、聴覚に感じられる音の比較によつて得られたものでないということである。それは服部博士その他同様の見解を有する音声学者の論を見ても容易に納得される。もつとも調音の差違又は類似性を知る手段として聴覚的な音を問題にする場合もあるが、それはあくまで調音相互の關係を求めするための補助手段に止るのであつて聴覚印象そのものの關係が問題になるのではない。又聴覚の感ずる音印象に基いて各音間の關係を求めようとしても決してこのような結果を導き出すことは出来ない筈である。^⑥ もつとも調音相互の關係とこれに対する聴覚のはたらき相互の關係が相互に一对一の關係にあるということが確認された事実であるとしてもいうのならば調音相互の關係∥聴覚相互の關係ということが出来るであろう。しかしそのような事は現在の段階において全然あきらかにされ得ないことなのである。^⑦ たとえば調音が1a 2a 3aと変つたのに対して聴覚が1b 2b 3bとというような反応を受けるといつた事情があつたとすれば、調音相互の關係∥聴覚相互の關係とはいへぬことになる。私自身この問題について積極的な解答をあたえることは出来ないが、少くとも調音相互の比較によつて得られた結果を聴

覚相互の関係と見做すべき何等の根拠もないことは確かであろう。

次に云いたい事は、このようにして得られた結果から直ちに音韻相互の関係を云々することはできないという事である。音韻というものが調音相互の関係と同じ関係にあるという事がわかっているならば、調音の比較によつて音韻的に同じものを抽出する事ができるかもしれないが、果して音韻がそのようなものであるかどうかはわかっていない。服部博士は調音の比較によつて抽出された単位 *a i u e* 等をフォネーム(音素)等と呼んでおられるが、私はまぎらわしさを避けるためにこれらを調音素と呼ぶことにする。

三、タチツテトチャチユチヨダデドについて

タ行音(タチツテトチャチユチヨ)に対する服部博士の結論は次の如くである。

ci チ
cu ツ

(cja) チャ (cju) チュ (cjo) チョ

ta タ
te テ to ト

即ちタ行音はアイウエオヤユヨ・カキクケコキヤキユキヨ等の如く一つの系列を形造らない。タテトとチツチャチユチヨとは別の系列に属するといふのである。一方この説に対しては佐伯功介氏の有力な反論がある。^⑧ 佐伯氏はタ行音が一系列をなすと考えられるのである。私はタ行音の解釈に関してはむしろ佐伯氏の方を支持する。しかし佐伯氏の反論に対しては更に服部博士の反駁が加えられたことであるし、^⑨ 私自身の考えも佐伯氏の論と全面的に一致するわけでもないから、あらためて服部説の根拠の概要を逐条的に掲げて検討し、最後に私自身の見解を述べることにしたい。

服部説の根拠一(原著 p.138~p.139)

(A) パピプペポピヤピユピヨ

(B) カキクケコキヤキユキヨ

(C) タチツテトチャチユチヨ

においてパペポ・カケコ・タテトの子音は閉鎖音（破裂的）である。又ピプピヤピユピヨ・キクキュキユキョの子音も閉鎖音（破裂的）であるが、チツチャチュチョの子音は破擦音である。故に（A）（B）の子音と（C）の子音との調音上の差異は相似的でない。

根拠一について。第一に注意すべきは、ここでは具体的な調音の比較が無く、閉鎖音とか破擦音という音声学上の単位に基いて調音の相似的關係が云々されていることである。そのような単位がどうしてもして系列決定の基準となるか、その点が先ず了解でもない。がそれは一応さしおくとすれば次に破擦音と閉鎖音（破裂的）を区別する基準が何処にあるかが問題になる。原著にはこれについて何の説明も与えられていないのでこれを他に求めると博士はその著「音声学」（岩波全書）において次のように述べていられる。

破擦音とは、閉鎖音の次にそれと調音点の同じ摩擦音が続き、両者の間に強さの弱まりなく、全体が漸強音或は漸弱音をなすものをいう。p.184

調音点の異なる破裂音と摩擦音とより成る破擦音は非常に稀であるが、Polivanov は、ドウガン語にシナ語の〔tʃ〕から変化した〔tʃʰ〕があることを報じている。p.185

両方の記述を照し合せて見ると、後の記述によつて「閉鎖音の次にそれと調音点の同じ摩擦音が続く」という特徴が破擦音の絶対条件でないことが分る。一応それは度外視するにしても「強さの弱まりなく云々」という表現も腑におちない。強さの弱まりというのは具体的には如何なることをさすか聴覚的に知覚される音の強さ（つまり sonority）の弱まりの意か、それとも調音に要するエネルギーの弱まりの意か、おそらく前者の意に解すべきだろうと思われるが、いずれにせよ何を以て音の弱まりと見るか、如何なる程度を以て漸強漸弱と見做すかということとは依然問題として残されるのである。要するにこの定義自体には甚だ曖昧な要素が含まれているのであるが、元来破擦音なるものを厳密に定義しようとするればどうしてもこのような曖昧さを生ぜざるを得ないのではないかと私は思う。そして佐伯功介氏が服部説に對する反論中で「破擦音とは出来合の名称に過ぎぬ」と言われたのもこのような事情を喝破したに外ならないと思われる。

るのである。博士は別の箇所で F. R. Edwards・O. Plehner・小幡重一・田口柳三郎氏等の記述を引用してチツ等の子音が破擦音であることを強調していられるが(原著 p. 141~p. 145, p. 264~p. 265)、破擦音と閉鎖音(破裂的)の本質的な違いが何処にあるかを明らかにしないかぎり両者の別を云々すること自体が無意味であるといえる。もちろん私はチツ等の破裂の後に顕著な摩擦的噪音が認められることは否定しない。しかしそのような「音の聞え」の問題が系別決定の鍵になるという考えには賛同できない。現に博士自身シャには「j」がほとんど聞き取られず、ビヤには「j」が聞き取られるという事実を認めつつも(註⑥及び原著 p. 175 参照)両者を一つの系列にまとめるといふ新説を提起された。しかもそのような考えを成立させる鍵が子音の口蓋性乃至口蓋化という調音上の相似性にあるという点を忘れてはならない。要するに根拠一においては具体的な調音の比較が無く、音声学上の単位(それも内容の規定が曖昧なものである)を始めから各音にあてはめ、それを根拠として系列が決定されている点が妥当でないと考える。

服部説の根拠一(原著 p. 139)

(D)	サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	シヨ	ショ
	[sa]	[ʃi]	[su]	[se]	[so]	[ʃa]	[ʃu]	[ʃo]	
(E)	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ	
	[dza]	[dzi]	[dzu]	[dze]	[dzo]	[dʒa]	[dʒu]	[dʒo]	
(F)	x	チ	ツ	y	z	チャ	チュ	チヨ	ト
		[tʃi]	[tsu]			[tʃa]	[tʃu]	[tʃo]	

において、調音の相似的關係を求めれば、x y z に該当するのはタ[ta] テ[te] ト[to] ではなく [tsa] シハ、[tse] シエ、[tso] ショでなければならない。

根拠二について。x y z がタ[ta] テ[te] ト[to] ではなく、[tsa] [tse] [tso] であるとされたのは (D) (E) (F) の調音の相似的關係によるものでなく、結果的に見て標音符号の対応に基づくものと言える。このような方法を用いるな

らば、たとえば /s/ の系列のシシャシュショの部分には [i] [a] [u] [jo] でなく、[si] [sia] [sju] [sjo] が該当する
 という結論を導き出すことができる。すなわち

ア	[a]	イ	[i]	ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	ヤ	[ja]	ユ	[ju]	ヨ	[jo]
カ	[ka]	キ	[ki]	ク	[ku]	ケ	[ke]	コ	[ko]	キャ	[kja]	キュ	[kju]	キョ	[kjo]
サ	[sa]	a		ス	[su]	セ	[se]	ソ	[so]	b		c		d	

において標音符号の対応を求めれば、a は [si]、b は [sia]、c は [sju]、d は [sjo] となるのである。

服部説の根拠三(原著p.139~140)

①無声音素(私の言う調音素) /p/ /k/ /s/ に対する有声音素 /b/ /g/ /z/ は各々同数(八つ)の音節を形成する。

② /p/ と /b/ と /k/ と /g/、/s/ と /z/ の調音的差異には著しい相似性がある。

②(C)	タ	[ta]	チ	[tʃi]	ツ	[tsu]	テ	[te]	ト	[to]	チャ	[tʃa]	チュ	[tʃu]	チョ	[tʃo]
------	---	------	---	-------	---	-------	---	------	---	------	----	-------	----	-------	----	-------

(G)	ダ	[da]	e		f		デ	[de]	ド	[do]	g		h		i	
-----	---	------	---	--	---	--	---	------	---	------	---	--	---	--	---	--

において、e f g h i の部分にジ [dʒi] ズ [dʒu] ジャ [dʒa] シャ [dʒu] シュ [dʒo] を補うと (C) (G) の間に /p/ と /b/、/k/ と /g/、/s/ と /z/ の場合に成り立ったような関係(①②のような関係)が成り立つ。そこで次のように系列を設定するのが適当である。

(G)	ダ	[da]	e		f		デ	[de]	ド	[do]	g		h		i	
-----	---	------	---	--	---	--	---	------	---	------	---	--	---	--	---	--

(F)	(H)
	タ
x	[ta]
チ	j
[tʃi]	
ツ	k
[tsu]	
	テ
y	[te]
	ト
z	[to]
チャ	
[tʃa]	l
チュ	
[tʃu]	m
チョ	
[tʃo]	n

(備考、博士は(G)(H)(F)のあきま e f g h i j k l m n x y z の部分には [di] [du] [dja] [dju] [djo] [ti] [tu] [tja] [tju] [tjo] [tsa] [tse] [tso] が該当すると考えていられる。原著 p.146・p.268)

根拠三について。④に関しては異論はない。⑤については多少問題がある。/p/と/b/、/k/と/g/はどちらも声帯の振動の有無によつて差別づけられ、それ以外に特に目立つた差異は認められないというのが現在の音声学者の一致した考えであると言えよう。故に両者の調音的差異には相似性があると見做すことができる。ところが/s/と/z/の間には声帯の振動の有無以外に、/s/の調音は摩擦的に閉鎖を伴わぬが、/z/の調音は破擦的で閉鎖を伴うという相違が認められる。もつとも方言によつては/z/が舌先の閉鎖を伴わぬものもあるが、その場合でも舌面と口蓋との狭窄の度合が/s/より著しいという差違が認められるようであり(詳しくは次条参照)、一般に/s/と/z/を比較すると後者の方が舌先と口蓋との接触度が強いという傾向が存する。故に/p/と/b/、/k/と/g/の間にもこのような関係の存する事を立証しないかぎり/p/と/b/、/k/と/g/、/s/と/z/の調音的差違は相似的であるとは言えない筈である。その意味で⑤の箇条が既に問題を孕んでいると言わねばならない。

又⑥に述べられたようなことは標準的な国語中のすべての方言に適用できない。ある方言のザ行子音は[z][ʒ]であらわされるような摩擦的調音であつて、[dz][dʒ]のごとく始めに破裂を伴う調音ではない。現に服部博士の発音がそうであるらしい。次に掲げるのはザ行子音に関する博士の記述である。

ザ行子音……有声の摩擦音に近い発音を有する方言もあるが、完全な摩擦音でなく弱まつた破擦音のようである。私自身の発音がそうであつて、ことに「ジ」の子音は少し力を入れて発音すると明らかな破擦音となるか、「シ」の子音は常に摩擦音である。人

工口蓋図をとつて見ても、「シ」の子音よりも「ジ」の子音における方が、前歯の歯茎の附近に形成される呼気の通路が明らかに狭く記録されるのが常である。(原著 p.123)

博士はこのような子音を「弱まつた破擦音」と呼んで居られるが、そのような表現は不当である。この記述の最後の部分を見ると「呼気の通路が狭く云々」とある。破擦音ならば当然「呼気の通路が閉鎖され云々」と書かれぬばならぬ。それをあえて「狭く記録される」というような矛盾した記述をなされたのは、人工口蓋図の記録が呼気の通路の閉鎖を示さず、狭いながらも通路が開かれていることを示していたという事情に基くものである^⑩と思われる。このような調音に対して破擦音という名称を附することは明らかに不当である。従つて服部博士のザ行子音は〔z〕〔ʒ〕とあらわさるべきであろう。ところでこのような子音を有するジ〔ʒi〕ズ〔zʊ〕ジャ〔ʒa〕ジャ〔ʒu〕ジエ〔ʒo〕をe f g h iの部分に補つた場合(C)(G)の間に㊦のような関係が成り立つであろうか。/p/ /b/ /k/ /g/はおろか/s/ /z/の場合の如き関係も成り立たない。/s/ /z/の場合は有声音素/n/の方が舌先と口蓋との接触度が強かつたが、チツチャチュチョとジズジャジュジョとの場合には無声の調音を有する前者の方が有聲の調音を有する後者より舌先と口蓋との接触度が強くなるのである。

服部説の根拠四(原著 p.146)

ティー、トゥー、デイー、ドゥーという発音をすることは子供達にとつても比較的容易であり、楽に発音する大人も少くない。それは/ti/ /tu/ /di/ /du/ という音素の結合がなく、その部分があきまになつてゐるからである。(あきまにについては服部説の根拠三備考の条参照)

根拠四について。ティトゥデイドゥが比較的発音し易い音であることについては異論がない。しかし発音し易い音はそれだけに限るまい。たとえばファ[Fa]シェ[ʃe]チェ[tʃe]等がティトゥデイドゥに比して発音しにくいと言えるだろうか。ところが博士の設定せられた体系の如何なる部分を探しても、これらの音の該当するあきまを見出すことはでき

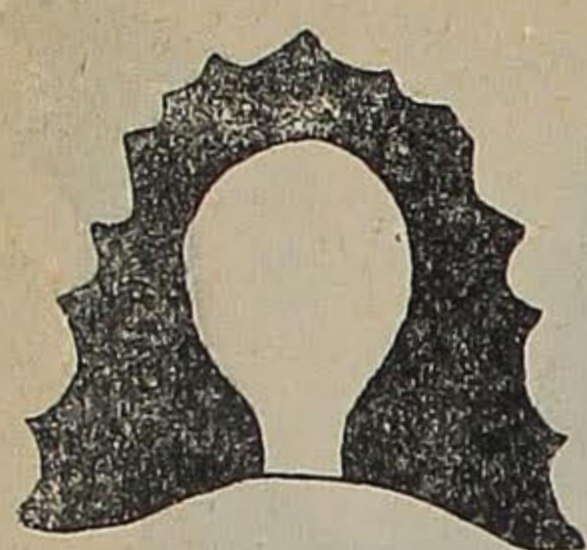
ない。又博士がタテトの系列の他のあきまに該当すると考えられた〔tja〕〔tju〕〔tjo〕は果してファシェチュ等より発音し易いとは言えるだろうか。要するに博士の体系のあきまは発音の難易と必然的な関係があるとは思えないのである。

以上服部説の根拠の主要なものはあげつくしたわけであるが、これらがいずれも博士の結論に対する積極的な裏付けにならぬことは明らかとなつたと思う。したがつて「タ行音が一系列をなす」という解釈は博士の論によつて否定されないのである。ところが一方「タ行音が一系列をなす」ということを積極的に論証することも極めて困難である。しかし少くとも私の体験に基づけばタ行音をタテトとチツチャチュチヨの二つに分ける考え方より、これを一つの系列にまとめる考えの方が妥当性があるということとは言えそうである。

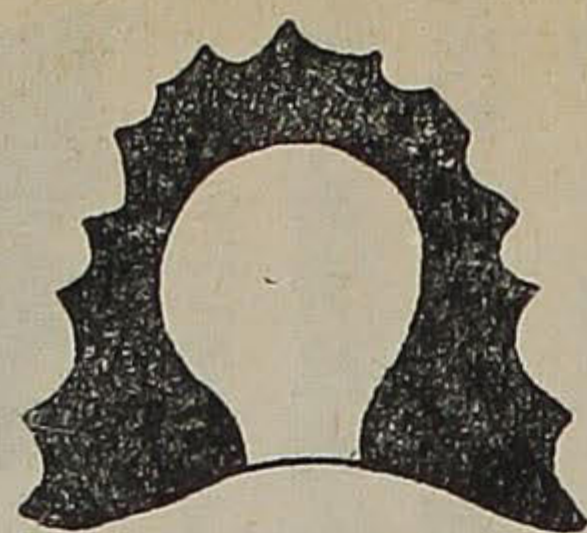
(I) タチツテトチャチュチヨ

(II) ナニヌネノニヤニユニヨ

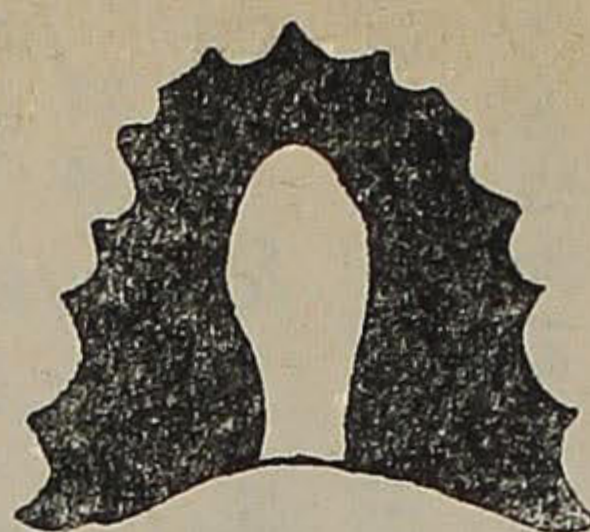
において、(I)の各音と、これに対する(II)の各音の調音を比較すると、(I)は始めに形造られた舌尖による閉鎖が無声の呼気によつて破裂し、(II)は舌尖が閉鎖している内から有声の呼気が鼻腔へ抜ける、という顕著な差違が認められるが、その他の点はかなりよく似ている。私(出生以来大阪市居住、両親は石川県出身)の発音では、タとナ、チとニ、ツとヌ、テとネ……等の始めの部分における舌面と口蓋との接触の仕方及び末尾部の調音には際立つた違いは殆ど認められない。ところがティとニとを比較すると、舌尖と口蓋との接触の仕方には明らかな差違が認められる。ティにおいてはほんの舌尖の部分だけが口蓋に接しているという感じがするのに対してニにおいては前舌部がかなり広い範囲に亘つて口蓋に接しているという感じをうける。このような顕著な差違はタとナ、テとネ、トとノ等の間にはみとめられないものである。そしてこのような事情は人工口蓋図にもあらわれる。次頁の上に掲げたのは私自身の口蓋図である。チニの図形は比較的似ているがティは全く異つた形をしている。そしてティはむしろヌイ〔ɛ:〕と似ている。もちろん口蓋図はいつも全く同じ形を取るとは限らないが、大体においてチニは常に青大将の頭のような形状を画き、ティヌイは



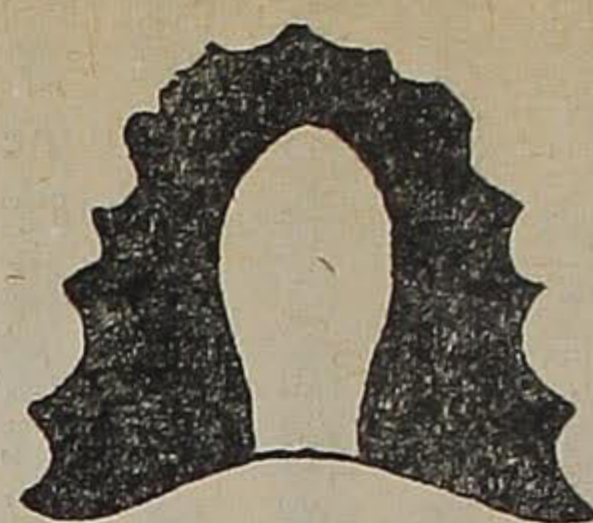
ヌイ [ni]



ティ [ti]



ニ



チ

「シャモジ」形を画くということが何回もの実験によつて確められた。又ナヌネノタツテト等の口蓋図は一々掲げなかつたが大体A図(次頁参照)のような形をとり、相互の間に図形上目立つた特色は認められない。以上のような結果から考えるとどうしても(I)と(II)の間に調音上相似的な関係を認める方が妥当であり、服部博士のようにティをチの位置にあてはめることには強い疑問を感じざるを得ないのである。もつとも上に掲げたような事実はいくまでも私個人の体験に基くものであつて、その意味で客観性に乏しいことは認めねばならないが、具体的な調音を比較したという点で服部博士のそれより正当であると言える。又タ行音を一系列にまとめるという考え方は佐伯氏の「日本語に現れたる父音について」⁽¹²⁾などにも示されているが、佐伯氏はその場合調音点の位置の比較からそのような結果を得られた。これも具體的な調音を取り上げたという点で服部博士の方法よりも妥当性があるといえよう。以上によつて私はタ行音を次の如く解する。

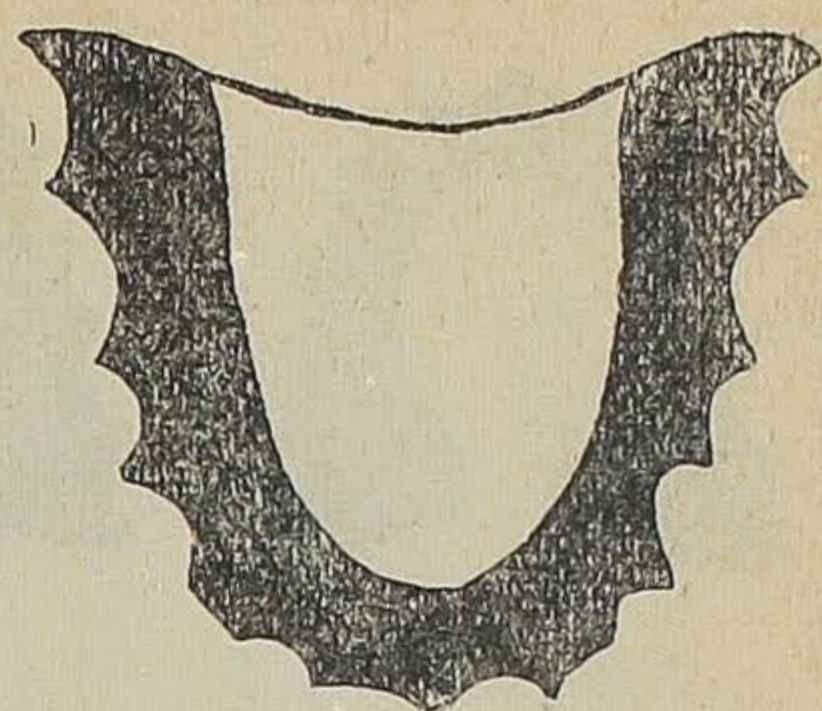
タ /ta/ チ /ti/ ツ /tu/ テ /te/ ト /to/ チャ /tja/ チュ /tju/ チョ /tjo/

さて次にダデドの系制的関係はどうなるか。

(I)	タ	[ta]	チ	[tʃi]	ツ	[tsu]	テ	[te]	ト	[to]	チャ	[tʃa]	チュ	[tʃu]	チョ	[tʃo]
(III)	ダ	[da]	ジ	[dʒi]	ズ	[dzu]	デ	[de]	ド	[do]	ジャ	[dʒa]	ジュ	[dʒu]	ジョ	[dʒo]

(ジズジャジュジョの始めに破擦的調音を有する方言を対象とする。摩擦音の方言については後述する。)

(I)(III)両系列の調音を比較すると前者は子音部で声帯の振動を伴わず、後者は振動を伴う



A 図

という違いがあるが、それ以外に目立つた差異は認められない。(I)が一系列をなすと見るならば、(III)も当然一系列をなすと見なしてよいと思われる。ところがかくすると非常に矛盾した事態が生ずる。既にジズジャジュジョはザゼゾと共に一つの系列を形造るという結論が出ているからである。もし(III)が一系列をなすということになると同じ音が二通りの系列に属することになる。それは明らかに不合理のように見える。しかしそれは決してあり得ぬことではない。抑々今まで取り扱つて来たアイウ以下各音の調音は厳密に言うて決して一定したものではなく、その調音は発音の度毎に動くものである。勿論動くと言つてもでたらめに動くのではなく、言わばある幅の範囲の中で動くといったものである。ところで今の場合ジズジャジュジョの調音の幅は丁度ダ行ザ行両系列にまたがっているであろうと私は考える。そこで先に結論を示せば次のようになる。

/za/	ザ	/zi/	ジ	/zu/	ズ	/ze/	ゼ	/zo/	ゾ	(zja)	ジャ	(zju)	ジュ	(zjo)	ジョ
/da/	ダ	/di/	ジ	/du/	ズ	/de/	デ	/do/	ド	(dja)	ジャ	(dju)	ジュ	(djo)	ジョ

そして /zi/ と /di/ ・ /zu/ ・ /du/ 等は調音としては異つたものであり、その差異は /za/ と /da/ の差違に相当するといふことになる。ところで我々は /za/ /da/ に該当する発音の差違を聞きわけが、 /zi/ /di/ に該当する発音の差異は聞きわけ得ないという社会的慣習を有する。もし調音の違い方と聴覚の違い方とが一致すべきものならばこのような結果が生ずることはあり得ないが、始めにも述べたように私は「調音相互の関係—聴覚相互の関係」ということを認めないからそこに何等の不都合も生じない。又ここで「/zi/ /di/」というような区別は現実の調音においてはあらわれない我々はこれを発音し分けていない。故にそのような区別を立てることは不当である。」との反駁が加えられるかもしれない。しかし調音素は解釈的に抽出されるもので一つの調音素に該当する具体的音声があるわけでないからそのような

反駁は意味をなさない。但し私はここで $/zi/$ $/di/$ 等の違いが如何なるものであるかについて一応説明しておく必要がある。それには (1) ザ行子音が破擦的調音である方言の場合と (2) 服部博士のその如く摩擦的調音である方言の場合に分つて考えねばならない。—— (1) の場合。先ず $/zi/$ $/di/$ の相違が $/za/$ $/da/$ の相違に相当することはいうまでもない。ところで $[da]$ ザ $[dza]$ を比較すると前者は後者に比して調音の始めにおける舌と口蓋との接触面が広く、又舌先を口蓋に押しつける度合が強いといふことができる。故に $/di/$ の方が $/zi/$ より調音の始めにおける舌と口蓋との接触面が広く舌先の口蓋への押しつけ方が強いことになる。又ダの子音よりザの子音の方が摩擦的傾向が強い。即ち破裂後に舌面と口蓋との間に狭窄が保たれる時間が長い。ジの調音においては常に舌先の破裂後に摩擦的調音を伴うが、その場合でも $/zi/$ の方が $/di/$ よりも舌先の破裂後舌面と口蓋との間に狭窄が保たれる時間が長い筈だということになる。同様なことはズジャジュジョについても云える。—— (2) の場合。 $/zi/$ と $/di/$ の違いが $/za/$ と $/da/$ の違いに相当することは (1) の場合と変りない。ところでザとダとの間には、前者は始めに舌先の閉鎖を伴わず、後者は閉鎖を伴うという違いがある。この違いは $/zi/$ $/di/$ の間にもあらわれる筈である。そこでもう一度服部博士のジの調音に関する記述をふりかえつて見ると、博士のザ行子音は弱まつた破擦音（つまり摩擦音）であるが、ジの子音は「少し力を入れて発音すると明かな破擦音となる」とある。つまりジは力を入れるか入れないかによつて閉鎖を伴つたり伴わなかつたりするのである。それは丁度 $/da/$ $/zi/$ の差違に相応ずる。かくて私はその少し力を入れた発音が $/di/$ に該当し、力を入れない時の発音が $/zi/$ に該当するのではないかと考えるのである。そしてこの場合 $/di/$ と $/zi/$ の違いが力を入れるか入れないかの違いに相当するといふのは、丁度 (1) の場合 $/zi/$ が $/di/$ より舌先の口蓋への押しつけ方が強いという結果が得られたのと軌を一にする。又 (1) の場合 $/zi/$ が $/di/$ より摩擦的傾向が強いであろうことを述べたが、今の場合その傾向は破擦・摩擦の差違となつてはつきり現れているのである。そして同様な事はズジャジュジョについても言えるに違いないと私は考える。服部博士はズジャジュジョについては何とも言つておられない

が、従来ザ行音においてザゼゾの子音は摩擦音であるが、ジズジャジュジョの子音は dz dz とあらわされるような摩擦的調音であるという見方も有力に行われて来た。これはやはり n が摩擦的調音である方言について観察された結果に基づくものであろうが、その場合のジズジャジュジョは常に必ず閉鎖を伴うのではなく、服部博士がジについて指摘されたように、力を入れるか入れないかによつて破裂を伴つたり伴わなかつたりする性質のものであろうと考えてさしかえあるまい。なぜなら調音を固定化して説明する一般の音声記述の態度から推して、力を入れない発音は、力を入れた発音に比べてぞんざいな感じがするため正当な発音として取り上げられなかつたと考えることは決して不自然ではないからである。

以上によつてタダ行音に対する私の解釈が不当なものではなく、かえつて服部博士や従来の音声学者に観察された音声的事実を適切に説明し得るものであることが明らかになつたであらう。

四、ワについて

そこで最後に残されたワの系列的關係について考えてみよう。結論を先に述べれば私は表三(次頁参照)のような關係が成り立つと考える。すなわちアはカガガ……等と共に横の一系列を形成するが、同時にワもカガガ……等と一系列を形成すると考えるのである。(wa はワとアの系列を特徴づける調音素である)そこで先ずこの二つの系列中で我々が容易にその差違を知り得るところのワとアの調音について考えて見よう。

従来アの調音については調音器が $[a]$ の構えを取るという点のみが注意されているが、厳密に言うとなんだけではない。なるほどアの発音において音の聞えるのは調音器官が略々 $[a]$ の構えを取つてからであるが、音が聞えなくとも、調音を問題にする以上アを発音する時の調音全体が当然注意せられてよい筈である。そこで改めてアの調音全体を観察すると、その後の部分の調音は従来言われているように、調音器官が略々 $[a]$ の構えをとり、その構えを若干

表三

ra	ma	pa	ba	ha	na	ta	da	za	sa	ɲa	ga	ka	'a
ラ	マ	パ	バ	ハ	ナ	タ	ダ	ザ	サ	ガ	ガ	カ	ア
(rwa)	(mwa)	(pwa)	(bwa)	(hwa)	(nwa)	(twa)	(dwa)	(zwa)	(swa)	(ɲwa)	(gwa)	(kwa)	(wa)
ラ	マ	パ	バ	ハ	ナ	タ	ダ	ザ	サ	ガ	ガ	カ	ワ

時間持続するものであるが、[a]の構えに移る以前において、始めはかなり狭かつた上下顎の開きが漸次大きくなり、それと同時に脣も上下に開き、舌面は調音の始まる以前の比較的口蓋に近い位置から低下する。つまり口が上下に開く運動をした後[a]の構えを取るという特色のあることがわかる（疑わしく思う人は鏡を見てアを発音して見よ。）それは[a]の構えが調音器官が自然位置にある場合に比べて開きの大きなものであるという点から考えても至極当然のことである。¹³⁾

さて次にワの調音を見るとアの場合とかなりよく似ていることがわかる。末尾の調音が[a]であること、始めに顎脣舌が上下に動いて[a]の構えに至るという点も一致する。しかもこのような特徴はイウエオユヨには無いものである。イウエオユヨの末尾の調音は[i][e][ɛ][o][ɯ][ɔ]であつて[a]ではない。又始めの部分で脣は殆ど上下に動かない。又ヤの調音は始めに顎脣舌が上下する点、末尾に[a]という調音を伴う点がアワに似ているが、その始めの部分において前舌部が著しく口蓋に接近しているのに対してアワにおいてはこのような口蓋性が認められないという点で非常に異つてゐる。なおイユヨはヤと同じような口蓋性を有するという点でもアワと異なる。今このような関係を示すると次のようになる。

分の調音		始めの部	末尾部の調音		
口	蓋性	顎唇舌の上下する運動	部	の	
			調	音	
無		大	[a]		ア ワ
有		小	[i]		イ
無			[u]		ウ
			[e]		エ
			[o]		オ
有		大	[a]		ヤ
		小	[u]		ユ
			[o]		ヨ

ところがこのアワとイウエオヤユヨの違いに相当する違いはカとキクケコキヤキユキヨ、ガとギグゲゴギヤギユギヨ、

国語における一音節の発音型式について

四七 (五九六)

……等の間にもひとしく認められる。例えば上表のア・ワ・イ・ウ・エ・オ・ヤ・ユ・ヨの位置にカ・キ・ク・ケ・コ・
 キヤ・キユ・キョ、あるいはサ・シ・ス・セ・ソ・シャ・シユ・シヨを置きかえて見よ。他の各項はすべてそのまま通
 用する。かくて(ア)∴(イ・ヤ・ハ・キ・ヤ・ユ・ヨ)∥(カ)∴(キ・ク・ヤ・ロ・サ・キヤ・キユ・キヨ)∥……と
 いう関係が成り立つ可能性はあつてもそれ以外の関係は成り立ち得ないことが明らかになつたと思う。ところで次にア
 の調音の相違点について考えて見ると、先ず眼に立つのは、(イ)　ワの方が始めに唇の上下する運動が著しいことと
 ある。アの場合も始めに唇が上下するが、その度合はワの時ほど著しくない。又　(ロ)　ワの調音の始めの部分におい
 ては唇舌等に力がいづつてゐるが、アの場合は唇舌等は弛緩してワの時のような緊張は認められない。(ハ)　ワの調音
 の始めには奥舌が多少隆起して略「ㄷ」の構えを取つてゐるが、アの場合には舌は前後にやや扁平な形を取り、奥舌
 はワの時ほど隆起しない。そして　(ニ)　アの場合は声帯の振動が、調音器官が略「ㄷ」の構えを取つてから始まるが、
 の場合は唇舌等が上下に動く運動を始めると同時に始まる。つまりアよりワの方が声帯の振動が早く始まるのである。
 以上によつてア・ワの調音に認められる眼立つた相違点をあげ尽し得たと思うが、今仮りに

ワ	ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ
x	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピヤ	ピユ	ピヨ

という二つの系列を設けてその時のxの調音と推定して見ると

(a)　xの始めには両唇破裂無声という調音があらわれることが予想される。(なぜならパピプペポピヤピユピヨ等は
 すべて始めに両唇破裂無声という調音を伴うからこれと同じ系列にあるxにもそのような共通点がなければならぬ)。

(b)　xは末尾が略「ㄷ」で終るような調音でなければならない。(ワの末尾の調音は「ㄷ」であるから)。

(c)　xはパよりもその始めにおける唇の上下する運動が著しくなければならない。(パとxとの違いはアとワとの違い
 に相当するから。相違点(イ)参照)。ところがパの調音はその始めに両唇が閉鎖されこれが上下に開くという特徴を持つ

ている。これより更に唇の上下する運動を著しくする為には両唇の閉鎖の度合を強く、つまり唇の押しつけ方を強くしなければならぬ。

(d) x はパよりも始めの部分で唇舌等に力はいつていなければならない。(相異点(ロ)参照)

(e) x はパよりも始めの部分で奥舌が隆起していなければならない。(相異点(ハ)参照)

(f) x はパより声帯の振動が早く始まるような調音でなければならない。(相異点(ニ)参照)ということになる。

さて今これらの条件を満足させるような調音を考えてみると x は力を入れたパに相当するであろうと言うことが出来る。すなわちそれは始めに両唇破裂無声という調音があり (条件(a))、末尾が〔 \bar{a} 〕で終り (条件(b))、両唇の閉鎖の仕方が強く (条件(c)) 唇に力はいつてい (条件(d))。又パを力を入れて発音すると舌とも力はいり (条件(d)) 同時に奥舌が高くなる (条件(e))。これは理屈ではない。実際に試みて見ればわかることである。パを力を入れて発音するようにして始めの唇の閉鎖を強くすると、同時に舌にも力はいり、口腔の奥の方で舌が高まりをつくるのが容易に感じられるであろう。但しこのような調音が果して (f) を満足させるか否かは明らかでない。すなわち力を入れて発音すれば声帯の振動を始める時期が早くなり、力を入れなければそれが遅くなるかどうかはわからない。しかしそれは手軽にこれを立証する方法が見当らないだけで、 x が力を入れたパに相当するであろうとする推論をくつがえすべき根拠にはならない。とにかく上に述べたような推論の結果が (a) (b) (c) (d) (e) という条件に符節を合わせるように合致するということは偶然とは考えがたい。しもこの場合パと x の違い (つまり力を入れるか入れないかの違い) は丁度ジの調音が力を入れるか入れないかによつて /p/ の系列に属するものと /n/ の系列に属するものとの別が生じたのと同じ傾向を示しているのである。以上によつて私はパと x との違いはパにおける調音の幅に相当し、その幅は /wa/ /a/ 両系列にまたがると考えるのである。同様のことはカガカサザダナハバマラ等についても言える。一々の場合については説明は省略するが、これらの発音はそれぞれの属する縦の系列の特徴に応じて調音は異つてゐるがすべ

表 四

															(wa)
															a
															i
															u
															e
															o
															(ja)
															(ju)
															(jo)
r	m	p	b	h	n	t	d	z	s	ɟ	g	k	ʼ	ワ	
ラ	マ	パ	バ	ハ	ナ	タ	ダ	ザ	サ	ガ	ガ	カ	ア		
リ	ミ	ピ	ビ	ヒ	ニ	チ	ジ		シ	ギ	ギ	キ	イ		
ル	ム	プ	ブ	フ	ヌ	ツ	ズ		ス	グ	グ	ク	ウ		
レ	メ	ペ	ベ	ヘ	ネ	テ	デ	ゼ	セ	ゲ	ゲ	ケ	エ		
ロ	モ	ポ	ボ	ホ	ノ	ト	ド	ゾ	ソ	ゴ	ゴ	コ	オ		
リヤ	ミヤ	ピヤ	ビヤ	ヒヤ	ニヤ	チャ	ジャ		シャ	ギヤ	ギヤ	キヤ	ヤ		
リュ	ミユ	ピユ	ビユ	ヒユ	ニユ	チュ	ジュ		シュ	ギユ	ギユ	キユ	ユ		
リョ	ミョ	ピョ	ビョ	ヒョ	ニョ	チョ	ジョ		ショ	ギョ	ギョ	キョ	ョ		

て始めに唇の上下する運動を伴い、しかもそれぞれの力を入れた発音と力を入れない発音との間には唇の動きの大小、奥舌のもちあがり方の大小、舌唇の緊張度の大小等「ワ」「ア」の間に認められたような調音上の差違を認めることができるのである。（たとえば力を入れたタと力を入れないタとの比較して見よ、前者の方が唇の上下する運動が顕著であり、始めにおける奥舌と口蓋との接近度が強く、舌唇等にも力がはいつているのを感じるのである）。かくて私はワとアの間に、表三に掲げたような系列的関係が構成されると考えるのである。

五、結 論

以上二、三、四で述べたところを総合すると標準的な国語の一音節の発音型式は表四の如きであらわし得ることになる。
 ・の列と(wa)列との交叉するところに「ワ」という区劃があるのは、ワが(wa)に該当することをあらわす。又「ジ」という区劃がdとi・zとiの列の交叉するところにまたがつて存するのは、ジが/p/乃至/s/に該当することをあらわす。他の場合についても同様である。）

なお私は今まで大体標準的な国語全般を対象として考察を進めて来たが、ここで標準的な国語と称するものの中には

諸種の方言が含まれてをり、それらの方言の発音は同じではない。たとえば東京方言等のフクブ……ユキユギユ等には唇のまるめのない前寄りの後舌母音〔ɸ〕乃至〔ɸ̚〕があらわれるが、近畿方言などではこれより多少円唇化した奥寄りの後舌母音があらわれるといわれる。しかしそのような傾向は各系列毎に一貫してあらわれるものである。（今場合は〔ɸ〕/〔ju〕の系列）。故にこれらの方言毎に見れば調音素の種類や調音素の構成する体系の形、又調音素と発音型式との間に形成される上掲の表のような関係には変りがないと思われる。従つて標準的な国語内における各方言の発音の差違は調音素の質の相違に基くものであつて体系の構成上の差違に基くものでないことが予想されるのである。

註① 108種の発音型式を有するのは所謂が行子音を〔g〕〔g〕両様に発音し得るような社会的慣習のある方言に限る。それ以外の場合は100種の発音型式しか有しない。表についていえばガギグゲゴギヤギユギョとは別にカギグゲゴギヤギユギョの発音型式のあるのは前者、無いのは後者ということになる。

② 五十音図やイロハ歌の末尾に附されたンに対してウンという発音がなされることはよく知られていることである。なお宮良当壮氏の次の記述はこの事実を裏附けるべき有力な傍証となるであろう。『ン』を吉川氏はきめて明瞭に〔ŋ〕と発音されたので驚いた。嬉しかった。音声学者と自認してゐる一流人でもこの「ン」を〔uŋ〕と発音するから常々癪にさわつてゐたからである。』（国学院大学国語研究会会報 No.5）

③ 便宜上服部博士の用いられたものを借用したが、理論上これらの代りにどのような符号を用いてもかまわない。

④ 因みに、は調音器官がはじめに積極的な調音を営まないという特徴をあらわすと考え得る。アイウエオヤユョにおいては調音器官はその自然位置から直ちに〔a〕/〔i〕/〔u〕/〔e〕/〔o〕/〔ja〕/〔ju〕/〔jo〕の調音にうつるのである。

⑤ もつとも博士は後に至つて系列の構成はそのままにしてヤユョを〔ja〕/〔ju〕/〔jo〕、キャキョキョ以下を〔kja〕/〔kju〕/〔kjo〕等と改めていられる（原著175頁以下。言語研究十六号 Phoneme, Phone and Compound Phone）。しかしこの改訂には承服できない。それは（一）かくすれば体系と符号のあらわすところとにくい違いができる。（二）この改訂が一旦調音の比較によつて求められた体系的事実を無視して単音に対する博士の解釈を根拠として行われた。（三）博士はアイウエオヤユョの系列において、ヤユョには積極的なフォネーム（j）があると考えられたが、その考え方に正当性を認め得ない（私自身は④にも述べたようにヤユョにおいてもアイウエオと同様消極的なフォネーム／があると考える）等の理由による。

⑥ たとえば佐久間鼎博士著「日本音声学」の中に次のような一節がある。「東京語の「フ」における子音も、特殊の両唇的子音〔フ〕ではなくして、「ウ」の調音を以てした気音〔フ〕に外ならない。その舌の位置や唇の形を母音「ウ」と「フ」の子音とについて比較してみると、ほとんど差違のないことを知るであらう。(中略)その音色において「フ」の子音はやゝ〔フ〕に類するか、その調音から見るときは、まったく別のものである。云々」。ここで博士はフの子音が調音の上ではハヒヘホと同類のものに見做すべきことを指摘しようとせられているのであるが、それは結局表二に示したハヒフヘホ等が一系列をなすという事実を別の表現法によつて指摘されたものといえる。ところでこの記述中「フ」の子音が「その音色においてやゝ〔フ〕に類する」とあるのはフの子音部において我々の聴覚がハヒヘホ等にみとめられぬような音を知覚するということを意味する。しからば吾々はハヒフヘホ以外の縦の系列において、たとえばアイエオとウとの間にそのような聴覚的な差違を認め得るだろうか。総じてウクググ等の子音部に〔フ〕に類した音が聞かれるといったことは未だ聞き及ばない。したがつて聴覚の受取る音という点のみから考えればフかハヒヘホ等と一系列をなすということは絶対に云えないことなのである。ついでにもう一つ例をあげる。從來ビヤシャは標音符号で〔bja〕〔ja〕と書きならわされている。それはビヤにおいては子音と母音の間のわたりの部分に〔j〕に該当するような音が知覚されるのに対してシャの場合にはそのような音が聞えないという音声学者の聴覚的判断に基くものである。そして一部の音声学者(たとえば神保格博士)はこのような判断に基いてビヤとシャは同じ類に属すべき音ではないという解釈を下されたか、服部博士はこれに対して「〔ヤ〕〔ビヤ〕〔ギヤ〕〔シャ〕の順序で〔j〕的わたりが強くなるとは言い得るが、〔ヤ〕〔ビヤ〕のそれを同じ〔j〕と見て、「シャ」のそれをゼロと見るのは独断的である」との反駁を加え表二にも見るようにシヤビヤは同じ横の系列に属するという説をうち立てられた。私も勿論結論的には博士の見解に同意するが、博士の論拠については納得しがたいふしがある。ビヤには〔j〕的な音が聞え、シャにはそういう音が聞えないということは従来の音声学者が等しく認めて来た事実である。その場合ヤビヤギヤシャの順序で〔j〕的わたりが短くなるということはシャに〔j〕が聞えないということ否定する積極的な根拠とはならない。又かりにシャにおいて〔j〕が聞えるとしてもビヤの〔j〕が顕著でシャの〔j〕が顕著でないことは博士の論によつて否定されない。しかもこのような聴覚的な差違はシヤビヤの属する縦の系列の各音間に相似的にあらわれるとは考えかたいのであつて、例えばシとビ・サとバ等の間に〔j〕の顕・不顕に應ずるような差違が聞き取られたというようなことは未だ耳にしたこともない。このような結果からすればビヤとシャが同じ類に属しないという解釈の方が正当なように思われてくるのである。ところが聴覚的な音の関係を抜きにして専ら調音という面から見れば至極簡単にシヤビヤは同じ横の系列に属すると見做すことができる。前者は口蓋化した舌先摩擦無声という調音から〔j〕の調音に続くし後者も同じく口

蓋化した両唇破裂有声という調音から〔ɓ〕の調音に続く。口蓋性ならびに末尾に〔ɓ〕という調音を伴うという点で両者には著しい相似性があり、両者を差違づける舌尖摩擦無声・両唇破裂有声という顕著な調音上の相違はシャビヤの属する縦の系列の各音間にひとしく認められる。従つてシャビヤが同じ系列に属すると考えることは何等不合理でないということになるのである。

⑦ 但し対象を、音響のある場合に限定すれば発音体の運動とこれに対する聴覚のはたらきとの間に成り立つ関係についてかなり明らかな結論が導き出されている。次に掲げるのは岩波全書「音」(小幡重一著)中の一節である。(同書 p.153)……「音の物理的強さと感覚上の強さは常に比例するものではない。物理的強さが倍になつても吾々は二倍に強く感じるものではない(中略)音響に限らず一般に刺激と吾々の感覚には所謂のウェバーフェヒナーの法則(Weber-Fechner's law)なる対数関係がある。今刺激の強さをE、感覚の強さをL、又Cを常数とすれば $L \propto \log E$ なる関係がEとLとの間に成り立つ。(下略)……この結果を適用すれば少くとも発音体の運動相互の関係と聴覚相互の関係とはいえないことになるが、残念ながらこれを直ちに今の場合に適用することはできない。なぜなら本稿で問題にする調音相互の関係なるものの物理的性格が明らかでないからである。しかし少くとも調音相互の関係と聴覚相互の関係と見做すべき根拠は何等存しないことだけはたしかであろう。

⑧ 雑誌「コトバ」第九巻第一号

⑨ 「佐伯功介氏の批評に答う」(音韻論と正書法 p.243)

⑩ 事実「音声の研究」第三輯 p.44 に発表された博士の口蓋図を見ても、「ジ」の子音は呼気の通路が閉鎖されていないことをあらわしている。

⑪ 現に東京方言等においてはスの母音が〔ɛ〕であるのに対してツには中舌的な〔ɛ̃〕が見られることがあるという。その場合にはツヌの末尾の調音はあきらかに異つてゐるわけで、私の場合とは多少事情が變つてくる。しかし私はその場合にはタナ等の末尾にも調音上そのような差違があらわれるのでないかと思う。もつとも従来それらの方言のツヌの母音の差違は注意されてきたがタナ等の母音の違ひは問題にされたことがないようである。しかしそれは前者の場合(ツヌの場合)の末尾の調音が狭い母音であるため舌の形のわずかな変異が音響的に著しい違ひをあらわし、聴覚に際立つた差違を感じさせるのに対して、後者の場合の調音が開きの大きな母音であるために、同じような調音の差違が聴覚にほとんど異つた印象をあたえないという理由によるものと思う。又実はこれと同じような事情を考えなければ同方言のサ行音がア行力行ガ行音等と調音上相似な関係に立つという解釈のごときもなり立たない。たとえば力行サ行両系列を比較した時クとスの末尾には〔ɛ〕〔ɛ̃〕との差違があるのに力とサの末尾の調音には何等の差違もみとめ得ないということになれば、両者の間に調音の相似的關係は成立しないことになるので

ある。(因みに服部博士はサ行の系列決定にあたつて、東京方言等のスはおいては「[su:]」のほか、それから区別された「[sm]」或は「[sm:]」という発音があることはない。」と言つて居られるだけで、それ以上の積極的な根拠はあげて居られない。)

⑫ 音声の研究第一輯

⑬ もつとも我々ははじめから口を大きく開いておいて唇等を動かさずに「[a]」を発音することができ、そのような発音は国語において社会的慣習的に定まつたアの調音ということとはできない。

補註

本稿においては対象を東京・大阪方言等に限つたため、それ以外の方言の場合について言及する余裕が無かつたが、大体的見通しだけを述べれば、例えばジヂ・ズズ等の区別のある土佐方言の場合は、表四の /di//zi//du//zu/ 等に相当する各部分の間に、発音型式の区分をあらわす境界線を設ければよいと私は考える。勿論その場合各調音素、殊に /d//z/, /t//s/ 等の内容は東京方言等のそれとは異つたものであるにちかない。従つて、土佐方言のタ行音の調音はすべて東京方言等のそれとは異なると考えられるのである。もつとも両方言のチツ等の違いは従来一般に注意されているが、タテトの差違は注意されていない。しかしそれは従来の土佐方言音の観察が聴覚によつてなされ、調音そのものの観察は行われていないという理由によるものと思う。現に服部博士の高知方言の発音に関する精細な記述(音声学協会会報23号)の如きも「すべて耳によつて観察した」ものであり、「人工口蓋図等はまたとつて見ない」旨、博士自身明言して居られるのである。

受贈図書

正岡子規文献目録(愛媛大学国文研究室)

玉篇佚文補正(馬淵和夫)

現代語の語彙調査婦人雑誌の用語(国立国語研究所)

昭和二十六年国立国語研究所年報 三(国立国語研究所)

受贈雑誌

アララギ、科野、平安文学研究、女子大文学、文芸研究、文

芸と思想、金沢大学法文学部編集、愛媛国文研究、商大編集、

日本文学史研究、国文学、語文、樟蔭文学、近畿方言、国語と

国文学、国語・国文研究、国文学論叢、季刊国文